

令和6年度第2回秋田県立博物館協議会議事録

- 1 開催日時 令和7年2月13日(木)
午後1時30分～午後3時00分まで
- 2 開催場所 秋田県立博物館 大会議室
- 3 出席者 17名
 - (1) 委員
梅津 一史 委員
大塚 俊一 委員
佐々木美香 委員
佐藤 操 委員
高島 由美 委員
早川 敦 委員(協議会会長)
仲山 智 委員
本田 由香 委員
三河 直樹 委員
佐々木 真 委員
 - (2) 生涯学習課 生涯学習・学芸振興チーム
糸田 和樹 学芸主事(兼)社会教育主事
 - (3) 事務局(博物館)
宇佐美行毅 館長
阿部 雅彦 副館長
新堀 道生 展示・資料チームリーダー
加藤 竜 普及・広報チームリーダー
丸谷 仁美 学習振興チームリーダー
佐々木朋子 総務チームリーダー
戸村 直登 総務チーム主事

4 議事概要

(1) 開会

(2) 館長あいさつ

(3) 会長あいさつ

(4) 案件

- ア 報告「令和6年度事業経過および令和7年度事業計画(案)について」
展示・資料チーム、普及・広報チーム、学習振興チームより説明
報告についての委員からの意見及び質問に対する回答は次のとおり。

[委員] 資料の見方について。企画展がいくつかあるが「美の交差点」の来館者数が9,314人、「稲穂の詩」は7,543人、で開催の期間はどちらも同じ65日くらい。そもそも来場者数を同じものさしで図っていいものか。同じような期間でも、来客数の開きがあると思うが、美の交差点のほうが好評だったという見方をすると良いのか、そのあたりはどのような見方をすると良いのか。

[事務局] 当館の企画展の入場者の季節の傾向として上半期が多く、美の交差点は上半期特にゴールデンウィークで大きなプラスがあった。秋で11月に入るとガタッと入館者数が減る。季節の影響がかなり大きい。

[委員] 両方まずまずととらえていいのか。

[事務局] はい。目立ってどちらが、ということではなかった。

[委員] 資料の寄贈がだいぶ増えている。この増減については年によって要因があるのか。

[事務局] 今年度に関しては菅江真澄で165点あったが、たまたま沢山所蔵している方からの寄贈があった。普段はそれほど多くない。ここ何年かでは、後継ぎがいなくて家をたたむので寄付したいという事例が増えている。寄付の要請は増えていくと考えている。

[委員] 県内の各地域に残された貴重な資料をきちんと保存していくというのも博物館の大きな役割の一つかと思う。そういうのを博物館として呼びかけるといった取り組みはあるか。

[事務局] 呼びかけてはいるが、収蔵庫に余裕がない。どんどん受け入れるという状況にはない。

[委員] お断りされた大きなものなどの例は過去にあるか。

[事務局] はい。既に同じ収蔵品がある場合や、あまりにも点数が多い場合はお断りしている。

[委員] 何をどう保管していくかという選択も大変な作業になっているのか。

[事務局] それぞれの部門で、それぞれの専門的見地から、秋田県の実然・文化を知るための有意なもの、という選別をしている。

[委員] デジタルアーカイブ化については6倍に増えたとのこと。アーカイブ化したものはどのように利用されているのか。活用できれば、より身近に貴重な資料を見たりできると思う。今後の展開、利用の方針はあるか。

[事務局] インターネットで自由に見ることができる。点数は随時増やしていく。今回は6倍に増えたが、既に写真があったため速やかに作業できた。今後も、写真を撮って説明をつけてという作業を進めて、徐々に増やしていく。

[委員] これらは、ホームページでアクセスして見ることができるか。

[事務局] ホームページの中に「アキハクコレクション」というアーカイブのページがある。

[委員] 年間どれくらいの利用者・閲覧者があるか。

[事務局] 個別の閲覧数については把握していない。

[委員] FaceBookで月5回不定期に更新とある。あえて不定期にしている理由があるのか。例えば、定期的に更新していればそれを楽しみにしている方もいらっしゃると思う。不定期だとたまたま載せる目玉になるものがあつた時だけの配信になっているのか。

Facebookは比較的年齢層の高い人が多く、若い人たちはInstagramを見る傾向にあると思うが、使い分けはどうか。

[事務局] SNSについて不定期というのは、イベント等を実施した時に更新をするという対応である。もっと小まめに更新すると思うが、現在はチームの業務として行っている。もっと投稿する職員を増やすことで回数を増やせる。やり方を工夫したい。

Facebookについては、Instagramと同時投稿で同じ内容をアップしている。定期的に見てくださる方がいらっしゃるが、あまり広がりが見えないのが問題点と感じる。来年度、SNSを使った効果的な広報の仕方があるのではないかとと思う。

[委員] セカンドスクールの利用実績では、特別支援の学校が昨年度と比較して若干増えている。障害をお持ちの方への博物館を楽しんでいただくような配慮、取り組みについてはいかがか。

[事務局] 特別支援の方への対応については、申し込みの時点で詳しく要望を伺っている。職員から「こんなことが提供できます」ということを詳しく提案し、打ち合わせをした上で来館いただいている。デジタルは手段の一つだが、子供たちの多くは実物に触れたいという要望が大きい。可能な限り触れるものを準備している。

多数の資料を提供してみたところ、「情報量が多すぎる」と言われた事例もあったことから、精査して限られたものを長くじっくり触ることができる資料やプログラムを、わくわくたんけん室で増やしていきたい。現在試行錯誤の段階で、特別支援の先生方と相談しながら作っていきたい。

イ 協議 令和7年度から5カ年の中期ビジョンについて
事前に配布した資料に基づいて事務局より説明
説明についての委員からの意見及び質問に対する回答は次のとおり。

[委員] 最初に読んだときに、秋田県の抱えている課題が表裏一体というところが、どういうことかと思ったが、今の説明でなるほどと思った。最初の「次世代につなげるために」という言葉の重みを感じられた。そのような感じで見てもらうと良くわかると思う。博物館の業務についてそれほど接してきたわけではないので、博物館が担わなければいけない役割というのがだいぶ昔と変わっていると感じた。地域の活性化なども担っていくという所を含めて、ちゃんと落とし込めるようになると良いと思う。色々な意味合いのこもったビジョンである。

[委員] 夏に開催した時も、動けない方たちのためにVR技術を使う、デジタルで見せる、ということが必要と述べていたが、内容に盛り込んである。先ほど支援学校の方も来館しているとのことで、障がい者向けの取り組みもしており、これらを全部見ると色々な期待感が持てる。全部をどんどん皆さんでやっていくのはなかなか大変と思う。大いに期待している。

小学生が減っているという話題もあったが、恐らく学校に行けていない子がかなり多く、学校に行けてないから博物館にも来れない子がいる。百数十人いれば十人くらいは不登校でという環境。教育現場も大変だが、子供たちのワクワク感を引き出す事業と思う。これを骨子として今まで通り積み上げてほしい。応援している。

[委員] 博物館の使命というのを感じた。県民の方へのメッセージというところでもあるかと思う。これを読んだ県民一人一人がここは自分もあてはまる、という当事者として共感できるものがあればいいと思う。網羅された作りだと思う。今日の説

明で納得したが、5年のビジョンは長いという印象を受けていた。会社でも5年計画というのがあり、世の中の時代変化とか世の中の移り変わりというのは早いので5年は長いのかなと感じた。今日の説明では丁度いいという印象を受けた。5年というのはどのような経緯で決めたのか？

[事務局] 高校などでも5カ年の中期ビジョンを作っており、15年ほど前から始まっている。その前は長期計画を作っているケースもある。当博物館でも遡ると10年の長期計画を策定していた。他の博物館でも5年間のビジョンを策定していることが多く、良好な場合には継続、達成できない場合は改革を行っている。今回の5年も令和2年から6年とあつという間に感じる。目標を設定すると5年でこれだけできる、とよくわかる。丁度良く感じている。

学校の場合は、その地域ごとに受験生、小学生、中学生の人数が分かり、1年後、3年後にどのくらいの生徒が入学するのかなどは推測できる。各学校で中期ビジョンを策定し、どうやってより良い学校にしていくかということを目指した。博物館も同様に、博物館の4つの機能「収集」、「調査・研究」などを、現代風な手法で取り組んでいくということであり、時代や社会情勢に合わせたこれからの博物館像に向かっていかなければならない、というビジョンとしている。

[委員] よく考えられている。DX化、デジタル技術、VR、ミュージアムDXという文言がいたるところに出てくるが、説明の中で「手で触れなければわからないこと」とあった。DXでなければ伝わらない良さ、博物館に来て手で触れなければわからない良さ、をどう両立していくのかというのがこの中期ビジョンではないかと思う。DXやデジタルコンテンツを入口にして、そこから博物館に足を向けてもらい、手で触れてもらって考えを深めていくという流れが子供たちのなかにできればいいと思う。

5年前に学校の中にこんなにタブレットがあふれ、教室で普通にインターネットが見られる、という環境になるとは全く想像していなかった。5年前と今では隔絶している世界。5年後の博物館は一体どうなっているのか、大変楽しみである。

[委員] 法律が改正され「秋田県の課題を色々な形で対応していく」、という難しい課題を博物館が担っているという点と、多くはないスタッフで色々な事に取り組んでいくというのはとても大変なことだと感じた。その中で、こういった取り組みは全部必要で、取り組んで結果を出してほしいと思う。大変だと思うがぜひ実現してほしい。

一点確認したいことがあり、私たちもビジョンを作る時には指標ということをよく問われる。数値化について、博物館の指標は「来館者」「アクセス数」色々あると思うが、これから5年計画の中で「来館者はどこまで増やす」「そのための施策としてこうやっていく」ということをこれから具体的に示すことになると思う。数値化することでPDCAサイクルにより測定し、改善するということが必要だと思う。継続するものが必要であると同時に、止める決断をする必要性がビジネスにはあり、測定しないと止める決断ができない。頑張してほしい。

[事務局] 前々回のビジョンでは数値目標をある程度立てていた。前回からは立てているが、外には出していない。今回は入館者数について、生涯学習課より5年後に年間7万8千人という目標が示された。今年度は現時点で5万8千人で、6万人になりそうである。5年後の目標値は、秋田県の人口減少を考慮に入れた数値で、コロナ前は年間8万人の来館者数であったのでそこに戻したい。

企画展以外に、セカンドスクール、出前講座、などたくさんのやり方で人に伝えていた。限りあるスタッフであるが、これまでのことを活用していきたい。

数値目標は大事で、「第4期あきたの教育振興に係る基本計画」という、教育委員会全体に関する計画を作成中で来年度から実施する。博物館等施設の入館者数を指標として提示しており、教育委員会で所管している博物館関係4施設、エリアなにかいの県立美術館、横手の近代美術館、大曲の農業科学館、当県立博物館、これら4館の入館者数の合計ということで指標を考えている。個別の指標があっても然るべきであるが、特別展・企画展など年によって増減があり、計画通り右肩上がりになっていくのは考えづらい。横手の近代美術館は今年ジブリ展があり爆発的な数字となった。4館の合計数で均して、秋田県全体の博物館にこれだけの人に足を運んでほしいと考え、努力していきたい。

企画によって来館者数がかかなり前後する。秋田県の人口は、昨年から1万7千人減少している。毎年1万人以上の人口が減少して、しかも小学生がかかなり少なくなっている。世代世代でも、厳しいところがある。本館は5万8千人で、昨年の5万6千人以上の来館者数にはなっているが、企画の集客数の違いもあると思うので、大事なのはいかに魅力ある企画やコーナー展を、どうやって我々学芸職員が検討して創り上げていくかであると思う。そこに来館数もついてくると信じて我々は日頃の研究・調査にあたっていると解釈していただきたい。

[委員] 教育普及活動や県民の知の拠点、文化の発信地、他の施設と連携して専門的な人材の育成に努める、とある。美術館のアートコミュニケーター、秋田では近代美術館の近美コミュニケーターは、年齢問わず中高生から上は7～8歳くらいの一般の方で、美術に文化に興味のある方々が色々な企画を皆で提案し、例えばワークショップをやるような活動をする。県民の方により親しみをもってもらうように、補助金の事業などを活用して大々的に博物館でも一般の方を〇〇コミュニケーターのように募集して就労してもらい、自ら1年の成果でワークショップをやる、ということもできるのではないかと。近美コミュニケーターとして3月に視覚障害の方にアート見学をしてもらうというワークショップを開催する。美術館、博物館は喋ってはいけないというイメージがあるが、この日はおしゃべりしながら鑑賞できる。開催を利用して色々なものを作って展示をし、更に来館者が手を加えて色々なものを作り上げていく、というプロジェクトを作っている。このようなことができると、地域の方が更に興味をもっていただけるようになるのではないかと。

[事務局] 現在アイリスの会のボランティア活動、友の会のファンクラブのような活動をやっている。提案いただいた、その人たちに企画をしてもらう、という所まではできていない。若い世代を使うという意味でも、面白い意見なので検討したい。

[委員] 今後、この状況が変わる中で目標が達成できるように期待している。また、より近づくようにしてもらえればありがたい。

[委員] 今までもデジタル云々という言葉がでてきたが、あきたミュージアムDX推進事業の中で、収蔵資料の目録を作るという話があった。大変良いことだと思う。東日本大震災での教訓で、色々な施設、個人が持っているものを含めて、どこにどのような文化財があるかという情報が共有されていなかったのだから、救出できなかった文化財がたくさんある。逆にそれが共有されていた県では、非常に早くレスキューが進んだという教訓があった。10年以上前からこれが大事だ、という話が博物館業界ではあった。施策レベルでは、デジタルというと画像のデータを用意してそれを皆さんに見せるというのがデジタル化というような事業ばかりであった。いいことだと思う。

合わせて、学芸の仕事自体のデジタル化、というのを考えてほしい。普通の会社のDXはこの点が肝で、学芸職員個人が持っている情報というのは案外共有されて

いない。かつデジタル化もされていないので、どこに何があるか担当者が変わるとわからなくなる。今までの蓄積があって、博物館でできる事が増えているはずだということになっているが、実はそうではなく、人がいなくなるとほとんどのものがそのまま無くなってしまう。そういうことも含めて情報のデジタル化による共有、どこにどういう情報があるかが探しやすくなるといった仕事のデジタル化も、大変ではあるがじわじわと下地を作ってほしい。

デジタル情報にしてしまえば、色々な技術があり色々な使い方ができる。そこにもっていくことが大変。アナログで存在している情報をどうやってデジタル化するか。いまだに人手でやるしかない。自動的にやってくれる機械がない。古文書をOCRで読んでもテキストデータを作ってくれない。

実物資料の情報化という作業もある。物そのものは何も言わないので、そこから何か読み取って情報を付けるのが学芸職員の仕事なので、それができる人がいないことには大前提が成り立たない。物から情報を取り出せる力量のある、そういう専門性のあるスタッフが揃っていないとそもそも話が成り立たない。この博物館は半分以上が学校の教員でまかなっているが、全国でも珍しい方になってきた。東北では秋田、青森、山形であったが、山形は昨年頃からどんどん専門職を採り始めた。なかなかボトムアップが実現しない、トップダウンでしか実現した例がない。せめて、学芸の半分、各部門1人が専門の学芸員といえる人を確保するのは色々な目標の大前提。中期ビジョンの最初にも学芸職員の専門性の向上を図りますとあるように、私が退職する頃に持っていた知識を持ち、大学院を出たばかりの博士課程に残っている学生はたくさんいる。応募をかけると大勢くる。博物館の人は専門知識を持っていて、なおかつそれ以上でないと普及ができない。公募でこういう人がくるはずなので、進めてほしい。中期ビジョンと離れ長期な話ではあるが、ぜひお願いしたい。

[議長] 中期ビジョンについては大変立派な文言で特に修正することはないと思う。これを現行のスタッフでどうやって実現していくのだろうか、というのが率直な感想である。これをやるのはすごく大変で、スタッフの皆さんに頭が下がる。実現するにはスタッフの業務をDXの技術を使って削減するというのを考えないと、とてもできないのではないか。秋田のボリュームゾーンであるシニアの方の力をなるべく使わせてもらおう、というような工夫が必要とも思う。

学芸員の方の専門性を担保していくという意味でも、ここまで多様なことに手をかけていたら自分の専門性を維持するということが難しくなってしまうのではないか。大学の中期ビジョンも立派なことが掲げられているが、我々もやることがたくさん増えてきて自分の必要な研究が進まない、ということにもなっている。状況は同じなのではないか。実際に対応されるスタッフのことを考えながら進めていかないといけない。

- ウ その他 令和6年度あきたMuseum機能強化事業「Museum特別展 充実事業」の評価について
協議会委員による外部評価のまとめ、来館者アンケート集計結果、「特別展」の分析と報告についての資料をもとに事務局より説明した。

(5) 閉会